音楽評

沢田研二ライブ（21日、グランキューブ大阪）

円熟と発散 奇跡の「同窓会」

沢田本人が舞台上で使った表現を借りれば「奇跡」の、今回のライブ。彼がメーンボーカルをつとめ、67年から71年まで活動したグループ・サウンズ「ザ・タイガース」のメンバーのうち、瞳みのる、森本太郎、岸部一徳の３人がゲストとして顔をそろえた。プログラムはすべてタイガース時代の曲＝写真、三村政司撮影。

沢田の声は、年を追うごとに艶っぽさを増し、多彩になってきている。その声で歌われることにより、個々の楽曲が、以前とはちがう表情をもって立ち現れた。たとえば「僕のマリー」「モナリザの微笑」といった初期のオリジナル曲。現在の沢田の声は、詞の物語に奥行きと色彩感を与え、時には歌詞世界の静けさを裏切るような凄（すご）みさえまとわせる。ストーンズ「SATISFACTION」のカバーでは、「よごれ」を帯びさせた声が、曲のもつブルージーな面をくっきりと描き出す。「坊や祈っておくれ」では、芯のある声が、楽曲の存在感自体を圧倒的に強いものにする。沢田の声の力が、かつての持ち歌の数々を「いま・ここ」での花として咲かせた。

もう一人の実質的な主役となったのが、ドラムスの瞳。バンド解散後、中国語教師としての道を歩んできた男が、40年を経て帰ってきた。「Justine」のボーカルで見せたハジケかたは、溜（た）めておいた全時間を一気に発散させるようなすがすがしさに溢（あふ）れる。

そして、聴衆。おそらく８割がたは50代以上の女性。「シーサイド・バウンド」では曲

独自のステップを踏み、「君だけに愛を」では、沢田が客席へ向ける指先に反応して歓声をあげる、かつてと同じファン行動。そこにあるのは、それぞれが経験した「かつて」をぐいぐいと「いま」に引き寄せ、楽しむパワーだ。こうした空気も、今回のライブを、ノスタルジーを超えるものにする上で一役買った。

この日、ホールに集った人たちの気持ちは皆同じ。いつかまた、こんどは全員そろったザ・タイガースを聴く「奇跡」に出会えますように、と。

（北川純子・大阪教育大学准教授、音楽学）

毎日新聞
夕刊
9月28日（水）
2011年（平成23年）
発行所：大阪市北区梅田３丁目４番５号
〒530-8251 電話(06)6345-1551
毎日新聞大阪本社

大阪版 4面